

大西洋同盟の分裂？—NATO のウソと挑発

【訳者注】3/6掲載のビクトリア・ヌーランドの大嘘といい、この NATO 司令官の大嘘といい、人を食った発言としか言いようのないもので、どうして同盟国の EU 諸国が何も言わないのか、それとも何も言えないのか、と世界中のウォッチャーは思っていたであろう。やはり我々が考えた通り、アメリカのこのプロパガンダは、完全に逆効果だったことが、このすぐれた分析からわかる。と同時に、狂気ともいふべき対露戦争戦略を、なぜアメリカが取らざるを得ないのかもわかる。最後に書かれている、特にメルケル首相への、即刻の積極的行動を求める忠告は切実である。世界最強の武力をもつ者が追い詰められたとき、どうなるのだろうか？

By Mike Whitney

Information Clearing House, March 10, 2015

「この戦争はロシア世界を破壊し、ヨーロッパを戦争に引き込み、ロシアを敵対国で包囲するために挑発されたものだ。この世界戦争を始める一方で、アメリカは自身の国内問題に取り組もうとしている。」——Sergei Glazyev, プーチン大統領のアドバイザー



NATO のヨーロッパ・トップ司令官 Philip Breedlove 元帥の作り話は、ドイツとアメリカの間に、大西洋同盟を崩壊に導きかねないクサビを打ち込んだ。ドイツのニュース雑誌「デア・シュピーゲル」によれば、ブリードラブは、“危険なプロパガンダ”を広めることによって、ウクライナ戦争の外交的解決を見出そうとするメルケル首相の試みを、繰り返し破壊してきた。このプロパガンダは、「ロシアが国境線上に部隊を進め、武器弾薬を蓄え、戦車

隊列を展開している」というものだ。しかし、例になく批判的なこの論文は、ブリードラブ一人を取り上げて、彼のいわゆる“ロシアの侵略”の誇張的な宣伝を咎めているが、シュピーゲル論文の本当の目的は、EUのリーダーたちが、モスクワとの軍事的対決を支持していないことを、ワシントンに警告することにある。

何が起きているのかを説明する前に、この論文の一部を覗いてみる必要がある。シュピーゲル誌によれば――

「もう何か月も前から、首相館の多くの人々は、ブリードラブ指揮下の NATO が、ロシア軍部隊や戦車の動きについて驚くべき知らせを発表するたびごとに、ただ頭を横に振るばかりだ。…それがベルリンを不安にさせるブリードラブの報告の調子である。虚偽の主張と誇張した物語は、NATO と、その延長上の西側全体の信用を失わせる危険がある、とウクライナに関する最近の会合でドイツのトップ官僚は警告した。

「例はいくらでもある。…危機の始まったころ、ブリードラブ元帥は、ロシアが4万の兵をウクライナ国境に集結させており、侵略はいつ起こってもおかしくないと警告した。この状況は「信じられないほど気がかりだ」と彼は言った。しかし NATO 同盟国の情報係官らは、すでにロシアの侵略の可能性を排除していた。彼らは、部隊の構成も装備も、差し迫った侵略にはつながらないと考えていた。

「専門家たちの意見は、ほとんどあらゆる点で、ブリードラブのそれと矛盾していた。4万の兵は国境にはいなかった。彼らの考えでは、はるかに3万を下回るもので、2万より少ないかもしれなかった。しかも軍事装備はほとんど国境に運ばれておらず、侵略の可能性はなかった。というよりそれらは、紛争の始まる前からそこにあったものだ。しかも、野戦中央指令部のような、侵略のための資材の輸送を準備している証拠はなかった。にもかかわらずブリードラブは何度も繰り返して、不正確な、矛盾した、明白に間違った声明をさえ発表していた。…

「11月12日、ブルガリアのソフィアを訪問中、ブリードラブは、〈我々はロシアの軍事装備の隊列を見た――主としてロシアの戦車、ロシアの砲兵隊、ロシアの空軍防衛システム、それにロシア正規兵が、ウクライナに侵入しているのを見た〉と報告し、〈これは OSCE が報告したのと同じものだ〉と言った。しかし OSCE は、東ウクライナ内部に、軍の輸送車両列を観察しただけだった。OSCE の監視員たちは、ロシアから入ってくる部隊について何も言っていなかった。

「ブリードラブは、自分の見方を訂正する必要を感じていない。〈私は、ウクライナ危

機中に行ったすべての声明を変える気はない」と彼は、疑問のある彼の主張のリストの
ついた声明文に対する質問書に答えて、シュピーゲルに書き送った。「ブリードラブの
戦争好き：ウクライナに関する NATO の戦闘的スタンスに対する、ベルリンの警告」
——Der Spiegel) [http://www.spiegel.de/international/world/germany-concerned-
about-aggressive-nato-stance-on-ukraine-a-1022193.html](http://www.spiegel.de/international/world/germany-concerned-about-aggressive-nato-stance-on-ukraine-a-1022193.html))

ヨーロッパを第三次大戦に引き込もうとする、この猛烈な軍国主義者についての、シュピー
ゲルの話に拍手するのは簡単だが、このストーリーラインは意図的に誤解を招くものでも
ある。過去 1 年間のウクライナの大失敗を跡付けてきた者なら誰でもわかるように、ブ
リードラブの歪曲に特に変わったところがあるわけではない。ジョン・ケリー国務長官も、他
の多くの人々も、大手メディアに対して同様の主張を数限りなく行っている。“ロシアの侵
略”というウソは原則であって、例外ではない。だから、シュピーゲルが、誰もと変わらな
いウソつきのブリードラブを、特に選んでターゲットにしたのは、なぜだろう？ 本当はこ
こで何が起きているのだろうか？

明らかに、シュピーゲル誌はメルケルの仕事を受け持っている。すなわち、ウクライナの紛
争をこれ以上エスカレートさせないために、ワシントンのヨーロッパ司令官チーフの信用
性を切り崩そうとしている。しかし、メルケルは、ブリードラブに恥をかかせて、たとえワ
シントンがこの地域を深淵に突き落しても、ドイツはその手には乗らないことを示そうす
る一方で、この將軍を叩くのを手加減することによって、かなり遠慮を示し、ケリーやオバ
マに極まりの悪い思いをさせないようにしている。これは相当なたしなみである——なぜ
なら先に述べたように、政治体制とメディアのほとんどすべての者が、この紛争のほとんど
あらゆる面について、とめどもなくウソをついているからである。メルケルは、まだ今のと
ころ、これら他の者たちを信用しないとは言おうとしていないが、もし“お行儀の悪さ”が
いつまでも続くようなら、そうするだけの気力をもっていると、このシュピーゲル論文は判
断している。

この論文は、ワシントンを強制して、対決的な方策を変えるように目論まれた、ワンツー・
パンチの一部である。2つ目のジャブが繰り出されたのは、昨週日曜日午後、欧州委員会議
長の **Jean-Claude Juncker** が、ヨーロッパは独自の軍隊を編成する必要があると発表した
ときである。ロイター通信によれば——

「ヨーロッパ連合は、ロシアや他の脅威に対抗するために、またこのブロックの対外政
策を世界中に示すために、独自の軍隊を必要としている、と欧州委員会議長ジャン・ク
ロード・ユンケルは、日曜日、あるドイツの新聞に語った。

「…自分自身の軍隊をもつならば、ヨーロッパは、同盟国家や隣接国家の平和への脅威に対して、より信頼性をもって反応することができるだろう。

「人はヨーロッパ軍が直ちに展開されることを望みはしないだろう。しかし共通のヨーロッパの軍隊があれば、我々は、ヨーロッパの価値を真剣に防衛するという明瞭なメッセージを、ロシアに伝えることになる。」（「ユンケルが EU 軍を要請、ロシアを抑えられる、と」） <http://www.reuters.com/article/2015/03/08/us-eu-defence-juncker-idUSKBN0M40KL20150308>

何が起きているかお分かりだろうか？ 一方において、シュピーゲルは NATO の最高司令官の信頼性に鉄槌を食らわせ、他方において、欧州委員会は、NATO を無用とするような独立した EU 軍を創ると発表して、力で動かそうとするアメリカを牽制している。これらは間違いなく、オバマ軍に動揺を与える大きな展開である。これは、EU 地域の安全の主たる保障者としての NATO の役割に、真っ向から敵対するものである。多分、ヨーロッパの人々はお人よしだから、EU 軍が「世界に明瞭なメッセージを送る」というユンケルの馬鹿げた主張を、真に受けるかもしれない。しかし絶対に間違いなく、“ペンシルベニア通り 1600 番地” [ホワイトハウス] の誰もそんなナンセンスを信じない。この動きは明らかに、ヨーロッパは NATO には飽き飽きしており、変化を求めているというメッセージを、ワシントンに送るように意図されたものである。それは、ブリードラブやその仲間たちが、「考えを一新して出直す」べき時だという意味である。

皮肉なことに、こうした展開は、メルケルと、2007 年にプーチンが有名な演説で述べた見解を調和させるものである。彼はこう言った――

「私は我々が、地球的安全保障の構築について、真剣に考えねばならない決定的な時期に到達したと確信しています。そして我々は、国際的対話によって、すべての参加者の利害の間の、合理的なバランスを探りながら前進すべきです。…アメリカ合衆国はその国家的な境界を、あらゆる意味で踏み越えています。…そしてもちろん、これは非常に危険です。それは、誰も安全を感じないという結果を生み出しています。私はこれを強調したい――誰も安全を感じていないのです。」（ロシア大統領ウラジミール・プーチン、第 43 回ミュンヘン安全保障会議、2007）

どうしてアメリカが、“世界の安全保障システムの管理人”としての役を自分に振ることができようか――その介入が、ソマリアの南端の国境からウクライナの北端にまでつらなる、人間を大きく間引かれた、形を成さない国家群を残したというのに。それは、“第三帝国”の略奪にも劣らぬ、くすぶる廃墟と悶える人間の苦しみの、混沌とした敵をなしている。

ヨーロッパの安全保障の要件は、ワシントンの利益のためにのみ動く、好戦的で戦争屋的な、アメリカに導かれる者たちが満たすことはできない。現在、NATOはその資金の75%をアメリカに仰いでいるが、それこそ、この同盟が、争いの調停や安全保障よりも、地球全体を通じて、その帝国主義的な侵略戦争を国際化することに、興味がある理由である。ウクライナの危機以前には、ヨーロッパのリーダーたちは、この愚かきわまる取決めの危険が見えていなかった——セルビア、リビア、アフガニスタンへの介入が、彼らを正気付かせてもよかったのに。しかし、NATOの無謀な行動が、核の大火によって、ヨーロッパを蒸発させる可能性のある今となって、メルケルやオランダのようなリーダーは、このような状況の流れを変えようとし始めた。忘れてならないのは、アメリカにとって理想のシナリオは、ヨーロッパとアジア大陸の大部分を破壊する限定戦争で、それによってアメリカを、“瓦礫となった”世界がワシントンには甘い汁となった、第二次大戦後の隆盛期に戻すことである。そうなれば、民族抹殺のマニアとして安楽椅子上で戦い、蓄えの十分にあるワシントンDCの安全地帯から地球を支配する者たちにとっては、実に素晴らしいことである。しかしヨーロッパにとっては、これはどう見ても勝利の得られる戦略ではない。ヨーロッパは戦争を望まない。そしてそれは、反ユートピアNWOという、より大きな栄光を得るために、大砲の餌に使われることはなおさら望まない。

プーチンのアドバイザーである[冒頭に引用されている]セルゲイ・グラジェフは、キエフが東部の連邦主義反乱軍に対するひどい“反テロ”キャンペーンを始めるずっと前から、ワシントンが何を狙っていたかを割り出している。彼はそれを次のように要約している——

「アメリカの人形遣いたちが、キエフ臨時政府にやらせようとしていた主たる仕事は、ロシアをウクライナとの全面戦争に引き出すことであった。こうした極悪犯罪のすべてが犯されたのは、この目的のため——市民居住者を保護するためにウクライナに部隊を送るように、ロシアを強制するため——であった。…

「アメリカの金融システムの破綻——対外負債に対処できないこと、新しい科学技術的秩序への打開策を財政的に支え、アメリカの競争力を支える投資がないこと、そして中国との地政学的競争での潜在的な敗北。こうした問題を解決するために、アメリカは新しい世界戦争を必要としている。」(Sergei Glazyev)

Bingo! [答えがわかった!] 着実に零落していく帝国——その地球的GDPのシェアが一年毎に縮みつけている帝国——が、初めからずっと戦争をしたがっていたのだ。アメリカがその急斜面の経済の下り坂を逆転させて、世界の唯一の超大国としての高みに留まるためには、それが唯一の方法なのだ。幸いなことに、EUのリーダーたちは、砂に隠して

いた頭をだいぶ前から引っ張り出して、何が起きているかを把握し、それに応じて行動を変えつつある。

メルケル政権の誰も——それを言えば他の誰も——シュピーゲル論文の主張を公然と問題にした者がいないことは、注目すべきである。なぜだとあなたは考えるか？

彼らの沈黙は、反プーチン・プロパガンダがすべて純粋なたわごとだということ、“悪なる”プーチンは戦車や兵隊をウクライナに越境侵入させていないこと、彼はマレーシア航空機17便を撃墜していないこと、またプーチンは、ある政敵をクレムリンのごく近くで、暗黒街のように撃ち殺させはしなかったことを、彼らはずっと前から知っていたことを示唆していないだろうか？ それこそ彼らの沈黙が言っていることではないのか？

もちろんそうに違いない。権力をもつ者が誰もこれまで公然と口に出さなかったのは——シュピーゲルが冷笑的に認めるように——「政治的議論に、ある程度の軍事的プロパガンダを交えることが必要」だからである。

「プロパガンダが必要？」

ワオ！ ここには、あなたがメディアであり見たことのない、メディアによる譲歩を見ることができる。しかしそれが真実ではないか？ ヨーロッパのリーダーたちは、一般大衆をあまり驚かさないように、ウソと付き合ってきた。言い換えると、それは **sheeple** [羊のように従順な大衆] にとっては、考え方を管理する程よい薬の量だが、我々の尊敬される殿様方にとっては、メッキを剥がされた真実なのだ。そう考えるべきだろう。ただ現在は、これら同じエリートたちが、ルンペンの大衆と事実を分かち合おうと決意している。しかしなぜ？ なぜ突然、真実を教える気になったのか？

それは彼らが、もはやワシントンの政策を支持していないからである。ヨーロッパの誰も、アメリカがウクライナ軍に、武器と訓練を与えることを望んではない。誰も、彼らが600の落下傘部隊をキエフに配備し、アメリカの輸送支援が増えることを望んではない。誰もこれ以上のエスカレーションを望まないのは、ロシアとの戦争を誰もしたくないからである。それくらい単純なことだ。

初めてヨーロッパのリーダーたち、特にメルケル首相は、アメリカの戦略的目的（アジアへの軸足転換）がヨーロッパのそれとは一致しないこと、実はワシントンの地政学的野心が、ヨーロッパの安全にとって深刻な脅威になることを理解した。残念なことは、メルケルが単に、何が起きているのかを理解するだけでは不十分なことだ。彼女は、EUの仲間と一つ

になって、ワシントンの計画を挫くための積極的手段を、今、取らなければならない。そうしないとアメリカは、プーチンが反応を強制されるまで、誘発とニセ旗攻撃を続けるだろう。ひとたびそれが起ったならば、もっと広範囲な、そしておそらく破局的な大火災は、避けられなくなる。

(Mike Whitney はワシントン州に住み、*Hopeless: Barack Obama and the Politics of Illusion* (AK Press) の執筆者の一人。 *Hopeless* はキンドル版でも読むことができる。)